

消滅に瀕した Bantik 語の姿

——多言語状態と言語変化——

内海 敦子

明星大学

【要旨】 インドネシア国においては国家語であるインドネシア語の勢力が強く、各地の民族語は危機に瀕している。本論文ではインドネシア国スラウェシ島のスラウェシ北部州で話されている少数民族の言語であり、絶滅に瀕している Bantik 語を例にとり、消滅に瀕した言語の姿を社会言語学的な観点と言語変化の観点から考察する。Bantik 語、インドネシア語マナド方言、インドネシア語標準変種の三つの言語変種の関わり合いをまず述べ、次に高齢層と若年層の Bantik 語の実際の運用について述べる。伝統的な Bantik 語の形をかなり保っている高齢層の narrative speech にも多くのマナド方言が含まれる。Bantik 語を日常的に使用する高齢層と異なり、若年層は不完全な形でしか Bantik 語を使用しない。また音韻的な規則や morpho-syntactic な規則が、高齢層のそれらとは異なってきており、言語磨耗と考えられる現象が観察される*。

キーワード：消滅に瀕した言語、オーストロネシア語族、Bantik語、言語接触、世代差

1. はじめに

インドネシアでは多くの言語が話されており、総数は 500 とも 700 とも言われている。イリヤン・ジャヤ州（パプア・ニューギニア島）で話されている言語のうちパプア系のものを除けばすべてオーストロネシア語族に属している。これらの言語の他に、インドネシアの公用語であり国語として制定されている「インドネシア語」が存在する。「インドネシア語」は現在ではインドネシアの津々浦々で理解されるようになり、インドネシア語以外の民族語の話者はほとんどがインドネシア語とのバイリンガルである。

「インドネシア語」はシンガポールの公用語の一つに制定されているマレー語及びマレーシアの国家語、ブルネイの国家語と同じ言語と見なすことができる。これらの国家語あるいは公用語の地位に制定されている言語は、それぞれの国および地域により数々の異なる特徴を見せてはいるが、それぞれの話者間の意思疎通には大

* 本稿執筆に当たっては、林徹教授、西村義樹准教授に有益なご助言をいただき、また、本誌の 2 名の査読者からは多くの改善点をご教示いただいた。また、長年にわたり指導して下さった熊本裕教授には数々の指摘をいただいた。ここに感謝をささげたい。

きな問題がなく、地域変種として捉えるのが妥当である¹。以下、インドネシア国内で、文語として用いられ、規範的に制定された変種を「インドネシア語標準変種」と呼ぶ。

インドネシア語は南シナ海周辺のスマトラ島、マレー半島西部、カリマンタン島（ボルネオ島）西部を中心として話されて来たムラユ語（Bahasa Melayu）あるいはマレー語と呼ばれてきた言語が母体になっている（cf. Adelaar 2005）。ムラユ語（あるいはマレー語でも良いが、以下呼称は「ムラユ語」とする）は Adelaar and Prentice (1996) で提唱されているように、第一に文語としての言語変種（literary Malay varieties）、第二に通商用語あるいはピジンから発達したリンガ・フランカとしての言語変種（trade Malay or Pidgin-Derived Malay）、第三に母語として話されているムラユ語の地域変種（‘vernacular’ Malay）、以上の三つのカテゴリーに分けることができる。

このうち、従来スラウェシ北部州（Provinsi Sulawesi Utara）²で話されて来たのは、上記の第二に挙げられた通商用語としてのムラユ語である。スラウェシ北部州の州都であり経済・政治の中心である都市マナド（Manado）の周辺で話されていることから³、マナド語（Bahasa Manado）と呼ばれている。以下、この言語変種をマナド方言と呼ぶ。なお、マナド方言の特徴については本稿でも少し触れるがより詳しい記述は Prentice (1994) を参照願いたい。

現在のスラウェシ北部州において、High Variety（以下H変種）として機能しているのは、Adelaar and Prentice (1996) による第一のカテゴリーである文語としてのインドネシア語標準変種である。多くの人々にとってのLow Variety（以下L変種）は現在のところ、従来この地域で話されて来たマナド方言である。ただし、マナド方言は勢力が強く活力に富んでいるだけではなく、かなりの威信を持っており、スラウェシ北部に流されている公共放送の場でもマナド方言はしばしば用いられる。教育の場でも、小学校（SD, Sekolah Dasar）のレベルでは最も多く使用される変種であるし、中学校（SMP, Sekolah Menengah Pertama）、高校（SMA, Sekolah Menengah Atas）のレベルでも教師、生徒共に話し言葉はマナド方言を多く用いるようである。

インドネシア語標準変種とマナド方言の他に、スラウェシ北部州の地域には土着の言語が存在する（Noorduyn (1991), Sneddon (1978, 1984, 1985) を参照）。すべてオーストロネシア語族、西部マライ・ポリネシア語派（Hesperonesian）フィリピ

¹ それぞれの地域の言語変種には規範が制定されている点が通常の地域方言と異なる特徴と言える。インドネシア語の標準語とマレーシア語の標準語は、発音、正書法、語彙の意味などに異なる点が多々ある。

² 約 15000 平方キロメートル、人口 200 万人程度

³ 実際には 100 ～ 300 キロ離れた Sangir 諸島や Talaud 諸島でも話されているし、西隣で 2001 年にスラウェシ北部州から分離したゴロンタロ州でも話されている。Prentice (1994) によれば、このマナド方言は、ポルトガル語の語彙や Maluku 諸島の中心地の一つである Ternate の語彙が混じっていることから Maluku 諸島周辺で発達した形跡があるという。

ン南部グループに属する四つの Sangir 諸語⁴と五つの Minahasa 諸語⁵, それに二つの Gorontalo 諸語である⁶。これらの言語は, 若年層 (1970 年代以降に生まれた層) がほとんど使用しない状態になっており, 親から子への通常の伝達もほぼ行われていないため, 消滅の危機にある。Bantik 語も例外ではなく, Noorduyn (1991) で既に述べられているように, 非常に不安定である。

2. Bantik 語話者を取り巻く多言語社会

この節では, 最初に Bantik 語話者が居住する地域において話されている言語変種と, それぞれの変種の機能・使用状況について述べる。次に, Bantik 語話者の言語使用を世代別に述べ, 更に, Bantik 語および他の言語変種に対してどのような姿勢を持っているのかについて述べる。

2.1. Buha 村の言語使用状況概観

Bantik 語は, その話者によって *babiga?* *m-banti?* と呼ばれている。*babiga* は「言葉」, *m* は所有を表す接頭辞, *banti?* が彼らの民族の名称である。

Bantik 語はスラウェシ北部州の州都マナド (Manado) から 5 ~ 20 キロ離れた九つの村⁷および 100 キロほど離れた二つの村⁸で話されている。Bantik 語について, Noorduyn (1991: 20) では “The sociolinguistic position of Bantik is precarious, as its speakers tend to form a minority in their village community and are under high pressure to switch to Manado Malay.” と述べられており, 既に 1990 年ごろには Bantik 語は存続が懸念される不安定な状態であったことが分かる。ここでは, 筆者が主に調査を行っている, マナドから 10 キロ程度はなれた Buha 村における Bantik 語の状況を中心に述べる。

Buha 村は近隣の Meras, Singkil の各村と同様, マナドに大変近い場所にある。これらの村の人々は, 現地の *microlet* と呼ばれる乗り合いバスに乗って, 30 分から 1 時間程度で容易にマナド市に通勤, 通学できるため, マナド市で働いたり学んだりしている人が多い。また, 食料品と生活の基本的な雑貨以外の買い物をする際, 例えば洋服や家具などを買う際には, マナドに行くしかない。すべての人が, 州都

⁴ Sagir 諸島で話されている Sangir 語, Talaud 諸島で話されている Talaud 語, マナド近郊で話されている Bantik 語, 半島の南側で話されている Ratahan (別名 Toratan) 語の四つが北部スラウェシ州で話されている Sangir 諸語に属する言語である。フィリピン南部のミンダナオ島南部では Sangil 語が話されており, Sneddon 1984 はこれを含めた五つを Sangiric languages と呼んでいる。本稿でも「Sangir 諸語」を同様の意味で使用する。

⁵ すべてスラウェシ北部州で話されている Tonsawang 語, Tontemboan 語, Tondano 語, Tonssea 語, Tombulu 語の五つの言語から成る。

⁶ これらの二つの言語とは Bolaang Mondondow 語と Ponosakan 語である。

⁷ これら 9 つの村のインドネシア語における表記は Singkil, Bengkol, Talawaan Bantik, Molas, Buha, Meras, Malalayang, Kalasei, Bailang である。これらの村の住民はプロテスタントである。

⁸ これらの二つの村はインドネシア語表記では Tanamon と Samoit である。これらの村の住民はイスラームを信仰している。

のマナド市によく出入りしている。マナド市には、Sangir 諸島や Talaud 諸島の人々、Minahasa 語を話す地域の人々、南スラウェシや中部スラウェシの人々などが移住するところでもある。従って、地域の共通語が人々に必要とされ、マナド近郊に住む人や、マナドで社会活動を行っている人々はすべてマナド方言を話せる。逆に言うと、マナド方言を話せなければ、活発な社会生活を送ることができない。

Buha 村とその近隣の地域はマナドで働く人々のベッドタウンとしてちょうどよい位置にあるため、他地域からの流入者が住み着く例が大変多い。しかも、1990年代後半より、自治体が主導して住宅地を形成し始めた。これにより、それ以前の村民人口の800～900人を上回る1000人程度の人口流入が起こった。これらの人々は当然のことながら Bantik 語は話さない。

第1節ではスラウェシ北部州のH変種はインドネシア語標準変種、L変種はマナド方言であると述べた。これは特に若年層（大体1970年代以降生まれ）に関しては完全に当てはまると考える。マナド方言は若年層の第一言語であり、家庭および親戚・隣人関係で用いられているため自然に獲得される言語変種である。これに対しインドネシア語標準変種は放送、教会などの改まった場で用いられる。ある程度までは自然に吸収しうるが、規範的な書き言葉を完全に習得するには学校教育の場などでの意識的な習得が必要な言語変種である。また、H変種であるインドネシア語標準変種は「放送、教育、教会、書き言葉」で用いられ、L変種であるマナド方言は「家庭、友人関係、隣人関係」で用いられる。それぞれの使用領域がかなりはっきりと決まっており、それぞれ活力を持っている。現在のような使い分けが徹底してなされ始めたのはせいぜい数十年くらい前からなので、まだ社会言語学的に安定した状態ではないが、一応ダイグロシアの状態にあると言える⁹。

下記では1940年代以前生まれの人々を「高齢層」あるいは「高齢の Bantik 話者」と呼び、1970年代以後生まれの人々を「若年層」あるいは「若年の Bantik 話者」と呼び、両者の言語使用について述べる。これらの中間の世代（1950～1960年代生まれ）は、1950年代生まれの人々は「高齢層」、1960年代生まれの人々は「若年層」に近い言語使用を示すが、どこかで完全に両者に分断できるわけではなく、それぞれの個人の成育環境（両親ともに Bantik 語を話すか、Bantik 語が話されている地域以外の場所に住んだことがあるか）によってかなり変化に富む。ここで1950～1960年代の人々を外して述べるのはばらつきが激しいからである。対するにここで「高齢層」と規定した集団と「若年層」と規定した集団の内部においては、言語使用に大きな違いが見られず、それぞれの集団の典型的なパターンがほぼすべての成員に認められる。

⁹ ここではダイグロシアが安定的な状態であるとした Ferguson (1959) を念頭において述べている。カルヴェ (2001: 48) が述べているように、ダイグロシアは常に変化にさらされているというのが実情であるとは言えようが、スラウェシ北部州においてインドネシア語標準変種とマナド方言のどちらの変種も、現時点においては近いうちに使用されなくなることは考えられない。

2.2. 高齢層の言語使用

高齢層（ここでは主に 1940 年代以前に生まれた世代をさす）の Bantik 語話者の言語使用について述べる。第一言語として、家庭で話されているのを自然に獲得したのは民族語である Bantik 語である。マナド方言は長じるに従って、他の民族との接触において用いる必要があり、経済的な力を得るため、ある程度意識的に習得された。従って、高齢層においては H 変種がマナド方言、L 変種が Bantik 語である、ともいえる。しかし、高齢層の人々も教会や冠婚葬祭の改まった儀式などにおいてはインドネシア語標準変種を用いるので、インドネシア語標準変種も H 変種としての機能を果たしている。

ここで、高齢層における三つの言語変種の使用領域について述べる。L 変種である Bantik 語は、その使用が主に primary relation に限られている。ここで言う primary relation とは Dorian (1981) にあるように、「家族、親しい友人同士」の関係を指す。高齢層は、家庭、あるいは親戚同士が顔を合わす場において、同じ世代以上のもの（配偶者、いとこ、親、おじおばなど）に対しては Bantik 語で話しかける。しかし、下の世代のもの（子供、甥姪など）に対しては Bantik 語を使う場合もあるが、マナド方言を用いることの方が多い。そして、孫世代（1990 年代以降生まれ）に対しては例外なくマナド方言を中心に使用する。血縁以外の人間に対しては、高齢層は Buha 村の同じ世代以上の者で、Bantik 語話者だと分かっているものに対しては Bantik 語で話しかける。Buha 村の同世代以上の住民でも、他地域の出身者に対しては、その人の Bantik 語能力に応じて Bantik 語を用いるかどうかが決定的である。若いうちに嫁いで来た他民族出身者は Bantik 語能力が高いことが多く、そういう人々に対しては Bantik 語が選択されやすい。Bantik 語話者かどうか分からない他の地域の住民に対してはマナド方言が選択される。Buha 村の住民であっても、若年層に対してはマナド方言を用いることが多い。ただし、若者が Bantik 語話者の高齢層に混じっている場で、若者に配慮して、高齢層同士の会話においてマナド方言をあえて用いるということは少ない。高齢層がマナド方言を用いるのは、第一に primary relation 以外の関係において、第二に（primary relation の関係にあったとしても）下の世代に対して、である。社会活動において最も頻繁に用いられる言語変種であり、使用領域が最も広い。

高齢層において、インドネシア語標準変種は主に教会や儀式などの改まった場とスラウェシ北部以外の出身者に対してのみ用いられる。例えば数年前ジャワ島から移住してきたばかりの人間、あるいは筆者のような外国人に対しては、意図的にインドネシア語標準変種を選択する。ただし、標準変種といっても、口語の標準変種であるため、文語に見られるような接辞の多用¹⁰や硬い文体に見られる接続詞の使

¹⁰ 特に動詞を形成する接辞 *meN-*, *ber-*, *-kan*, *-i* は口語のインドネシア語標準変種においては文語に比べ使用頻度が著しく低い。また、*-kan*, *-i* などの動詞の項を増やす働きを持つ接辞はジャカルタを始めとする多くの地域の口語インドネシア語においては *-in* で置き換えられることが多いが、マナド在住の人々が *-in* を使用する頻度は低い。

用¹¹はない。しかし、マナド方言の代名詞¹²を使用せず、インドネシア語標準変種の代名詞¹³を用いたり、マナド方言の否定辞 *nyanda*¹⁴を用いずインドネシア語標準変種の否定辞 *bukan, tidak*¹⁵を用いたりするなど、意識的な切り替えが観察される。ただし、高等教育を受けていない人々は語彙的にも統語的にも完全なインドネシア語標準変種を用いることは少ない。

2.3. 若年層の言語使用

既に述べたように、若年層が第一言語とするのはマナド方言であり、活力のある L 変種として使用されている。H 変種であるインドネシア語標準変種は高齢層と同様で、教育、教会、儀式などの改まった場および他地域出身者に対して用いられる。

若年層の Bantik 語使用は、マナド方言やインドネシア語標準変種の使用に比べ、個人差が激しい。まず、若年層でも 1990 年代以降生まれの人々はほぼ Bantik 語を使用しない。語彙のいくつかは知っているものの、自分ではあまり用いない。ただし、会話を Bantik 語で全く行えなくても、理解はある程度できるのが普通である。若年層のうち、1970 年から 1980 年代前半に生まれた者についてはある程度 Bantik 語を使用することができるものが多い。

次に性差について述べる。若年層の女性は総じて Bantik 語の能力が低い。Bantik 語の語彙はある程度知っていても、基礎的な語彙が分からないことも多く、Bantik 語のみで文を形成することに困難を覚える人が多い。Bantik 語の理解能力はある程度あっても、自分では用いない。若年層の女性に限って言うと、primary relation においても Bantik 語を使用する人は大変少ない。

これに対し、若年層の男性の Bantik 語能力は総じて同世代の女性よりかなり高い。村の居酒屋で集まって飲みながら話したり、村の共同作業や、農業、建設業の日雇い仕事をしたりする際に、高齢層は主に Bantik 語で話す。居酒屋で飲むのは主に男性に限られる。また、村の共同作業は、高齢層は男女を問わず参加するが、若い女性の参加は皆無であるのに対し、若い男性はこのコミュニティに参加することがあるので、年配の人々と Bantik 語を話す機会が多い。しかし、若年層は他の業種を好み、マナドあるいは他地域に働きに行くことが多いので、村にいる時間が

¹¹ *sesudah* 'after', *sebelum* 'before' や complementizer として機能する *bahwa* が使用されることは大変稀である。

¹² *kita* '1sg', *torang* '1pl', *ngana* '2sg', *ngoni* '2pl', *dia* '3sg', *dorang* '3pl' となっている。マナド方言における一人称単数の *kita* はインドネシア語標準変種の一人称複数包括形と同じ形式である。マナド方言の一人称複数は *torang* のみで包括形と排他形の区別はない。この中で標準変種と同じ意味と同じ形式で表すのは三人称単数の *dia* のみである。

¹³ *saya, aku* '1sg', *kita* '1sgINC', *kami* '1sgEXC', *anda, saudara* '2sg', *anda sekalian, saudara-saudara* '2pl', *dia* '3sg', *mereka* '3pl' が代表的な標準変種の代名詞である。一人称複数には包括形と排他形の使い分けがある。一人称と二人称に関しては他の形式もある。

¹⁴ マナド方言においては否定辞 *nyanda* をすべての品詞の前に置いて用いる。

¹⁵ 標準変種においては *bukan* は名詞の前に置かれ、*tidak* は形容詞と動詞の前に置かれて否定を表す。

少なく高齢層の Bantik 語話者と接する機会のない者の Bantik 語能力は低い。

若年層の男性が primary relation において Bantik 語を使用するかどうかは、個々の Bantik 語能力と、それぞれの人が置かれた環境によって異なる。Bantik 語能力の低いもの（高齢層の Bantik 語話者と接する機会の少ないもの）は primary relation においてもマナド方言の使用が主体となる。Bantik 語能力の高いものに関しては、親戚・隣人関係で言えば、主に上の世代の Bantik 語話者が複数いて Bantik 語が使用されている場においては Bantik 語を交えて話すことが多いが、一対一で高齢層と話すときにはマナド方言が主体となることもある。家庭では親世代が Bantik 語をどれだけ子供に対して使うかによって、使用する変種が異なるようで、親世代が子供に対してマナド方言を主に用いる場合は Bantik 語は使用されないし、親世代が Bantik 語主体で話しかける場合は子供も Bantik 語を交えて話すことが多い。

若年層同士で Bantik 語を話すことは、女性同士、あるいは男性と女性の間ではほとんど見られない。若年層の男性同士であれば Bantik 語を使用することもあるが、主にこれは Bantik 語を解さない人間に聞かせたくない話をする場合に限られ、‘secret jargon’ としての用法と見られる。自然な状況ではマナド方言が使用される。

このように、若年層においては Bantik 語の使用領域が極端に狭まっていること、親世代となった若年層はもはや自分たちの子供に対し Bantik 語を伝達しないことから、現在の状態が続けば Bantik 語の消滅は必至である。

2.4. Bantik 語話者の Bantik 語に対する姿勢

Bantik 語は消滅に瀕しているが、当の Bantik 語話者自身は、そのことをどう捉えているかをここで述べたい。

1990 年頃から、大体年に一回、Bantik 族が集まって祭りのような催し物を行っている。ここでは、Bantik 族の伝統的な踊りを披露する場がある。また、Bantik 語の保存を唱える人々の集まりもある。Bantik 語の保存について、すべての人が無関心というわけではない。しかし、もし保存していくのであれば、とにかく子供たちに教えることが必要であるが、そのような行動は取られていない。Bantik 族の祭りにおいては、インドネシア語標準変種にマナド方言を交えた形で式が進行していた。また、Bantik 語の保存を目的とした集まりでは、主に聖書の Bantik 語訳に焦点が置かれ計画されていた。容易に訳せる賛美歌はいくつか Bantik 語に訳されており、集まりでは賛美歌を皆で歌うことと、聖書の内容を Bantik 語で説教するといった、キリスト教（プロテスタント）の活動の一環としての様相を見せている。ただし、集まりではマナド方言が通常の会話で用いられ、聖書の話をする場面になるとマナド方言と Bantik 語の二言語で同一内容を繰り返すようにしていた。まれに Bantik 語話者でないものも混じる上に、Bantik 語話者とされる者でも、使用頻度の低い単語が理解できないことがあるからであろう。Bantik 語の辞書は作成中と聞いているが、子供たちに教えるとか、Bantik 語だけで会話する場を設けるといった積極的な普及のための計画はない。Bantik 族の村々では、かつて（1980 年代まで）小学校

では「地域語 (Bahasa Daerah)」の時間に Bantik 語を教えていたようだが、現在では他地域からの流入者が多いためもはやそのような授業は行われていない。

Bantik 語話者の高齢層は「Bantik 語は伝えて行きたい。正しい形で書き残されることを望む」という人が多く、若年層も同様なことを言う。しかし両者とも孫世代、あるいは子供世代に伝えようとはしない。2007 年現在、若年層のうち親世代となっているものはまず子供にマナド方言で話しかけ、マナド方言を獲得するのを望む。学齢期以降の子供に対しては、インドネシア語標準変種を習得し「きちんとしたインドネシア語」を使いこなせるようになることを望む。それが教養あるインドネシア人として、社会的・経済的に成功する上で不可欠と感じられているからだ。

彼らは、インドネシア人としてのアイデンティティと、マナド人 (マナド周辺地域出身者) としてのアイデンティティを持っている。Bantik 族としてのアイデンティティは、周辺の民族と戦争をしていた時代には重要なものであったろうが¹⁶、現在ではあまり強い意味を持たない。そして現在、彼らは外見上も文化的な背景もマナド人の典型に当てはまる人々であるので、マナド方言の話者であることに矛盾を感じない¹⁷。

Bantik 語が 2000 年代におかれている状況は、Schmidt (1985) で述べられている、1980 年代初頭のオーストラリア、クイーンズランド州北東部で話されていた Dyirbal 語の状況によく似ている。第 4 節で述べるが、1980 年代初頭の若年層 (15 ~ 39 才) の Dyirbal 語話者と同様、若年層の Bantik 語には高齢層の話す Bantik 語と異なる点が多々あり、消滅の危機に瀕した言語が示す特徴を見せている。2000 年代の Bantik 語と同様、1980 年代の Dyirbal 語は子供達にもはや伝達されなくなっている。

しかし顕著に異なる点もある。Schmidt (1985: 16-40) では、伝統的な Dyirbal 語話者は若年層の Dyirbal 語を直そうとすることがよくあると述べられている。また Dyirbal 語が話されているコミュニティにおける H 変種である英語を若年層が混ぜて使うと、完全な Dyirbal 語のみの文に修正する。したがって、若年層は自分達の Dyirbal 語が不完全だという認識をしている。これに対し、高齢層の Bantik 語話者は若年層の Bantik 語を直すこともなく、若年層の話者も自分達が不完全な Bantik 語を話しているという認識はない。単に、上の世代に比べて知っている Bantik 語の語彙数が少ないとのみ感じている。しかし、実際には若年層の話者は音韻的にも形態的にも統語的にも高齢層の Bantik 語と異なる特徴を持つ Bantik 語を話しているのである。また、そもそも高齢層自身が第 4 節で述べるようにマナド方言を混ぜて話しているから、若年層がマナド方言を Bantik 語に混ぜて使っても注意しない。

両言語の高齢層の話者の民族語に対する姿勢の違いは何に起因するのだろうか。

¹⁶ 周辺の Minahasa 族と Bantik 族との間にはしばしば戦争が行われていた。

¹⁷ 例えばイリヤン・ジャヤ出身者がマナドに住むことはあるが、他のマナド人とはかなり異なる外見をしているし、文化的にもマナドあるいはインドネシアに完全に同化されていない。これに対し、Bantik 族は生粋のマナド人でありインドネシアに完全に溶け込んでいる。

Schmidt (1985: 13-15) に述べられているように、オーストラリア原住民の人々は、白人社会に依存しているものの、白人社会には溶け込めてはいない。社会的・経済的に活躍する場は Dyirbal 語話者には与えられていない。外見も白人とは全く異なる。このような状況では民族語を大切に思う気持ちが強くなるであろう。ただし、第一に子供達が獲得すべきと考える言語変種は H 変種たる英語なのである。そうでなければ生きていけないことを認識しているからだ。ここではアイデンティティの拠り所の言語変種と、子供に教えるべき社会的に有用な言語変種が異なっている。しかし、アイデンティティを保とうという気持ちから、伝統的な民族語の姿をできるだけそのまま伝達したいという希望が生まれるのではないだろうか。だから異なった構造に変化しつつある若年層の Dyirbal 語をできるだけ訂正し、英語で話さず Dyirbal 語で話すよう促す者が出てくるのだと考える。

これに対し、上に述べたように Bantik 語話者は完全にマナド人としてのアイデンティティを持ち、外見上も区別されず、社会的・経済的な活躍の場は Bantik 族であることによって狭められることはない。マナド方言のみの話者であることに矛盾はないのである。ここでは、Bantik 語はアイデンティティの拠り所としての機能を失いつつある。高齢層 Bantik 語話者が若年層の Bantik 語使用に対してみせる柔軟な姿勢の理由は、ここにあると考える。

このように民族語がアイデンティティの拠り所としての機能を失ったため、使用されなくなっているのにもかかわらず保存しようとする動きが大きくなる様子も、他のスラウェシ島北部州の言語にも共通して見られる。Bantik 語と同じく Sangir 諸語に属する Ratahan (別名 Toratan) 語話者においても全く同様の言語に対する態度が観察されるということである (Anthony Jukes, 私信)。Minahasa 諸言語においても似たような状況であるとも聞いた (Maxi Koyong, 私信)。

第3節以降では、マナド方言と Bantik 語の係わり合いと、消滅に瀕した Bantik 語がどのような姿を見せているかを述べていく。

3. Bantik 語とマナド方言

Bantik 語話者は、全員がマナド方言とのバイリンガルであるため、Bantik 語を話していても、マナド方言が混じることがある。第4節では、高齢層が Bantik 語で話そうとする際に混入されるマナド方言の語彙にはどのようなものがあるかを分析していくが、この節では本稿で観察の対象としたデータの説明と、Bantik 語とマナド方言の特徴およびマナド方言の混入の扱いについて簡単に述べる。

3.1. Bantik 語のデータ

ここでデータとしたのは、2007年7月から8月にかけて筆者が Buha 村で採集した自然な発話を録音し、書き起こしたものである。高齢層の Bantik 語話者十人に集まってもらい、一人一人、個別に話してもらった。うち二人は民話を語ってくれた。この十人の人々は同じ共同作業に関わっている。筆者はこの共同作業についての説

明を主に、何でもよいから話をしてくれと依頼し、その場での自然発生的な発話を録音した。書き起こしには、共同作業に参加しており、この場に出席していた方々で、長年コンサルタントとして協力してくれた二人の話者¹⁸に協力を依頼した。このうち、相対的に長い発話をを行った四人の話者の共同作業や Bantik 族の文化に関する説明の発話と、他の二人による民話の語りを分析する。前者は以下の記述で「説明テキスト」と呼ぶ。一人につき 10 から 20 文程度の長さである。後者は「民話テキスト」と呼ぶ。民話テキストはそれぞれ 200 文程度と 300 文程度の長さである。両テキストとも、混入されるマナド方言に大きな違いは見られないので、以下では区別せずに分析する。分析対象は主にこれらのテキストであるが、補足のために、1996 年から 2003 年に渡って現地調査で得られた、コンサルタントの Bantik 語話者による作例も挙げる。

協力してくれた方々は 1940 年代生まれ。男性 3 人、女性 3 人である。上で述べた高齢層の Bantik 語話者の典型的な言語使用を行っている。説明テキストは男性の A と R、女性の K と M の四人によるものである。以下では A テキスト、R テキストなどとして言及する。民話テキストは男性の D によるものは Kasimbaha という男性が主人公の話で、「天人乙女（あるいは白鳥乙女）」に類似のモチーフが中心となったものである。女性の S によるものは、「猿蟹合戦」のインドネシア版で猿（Bantik 語では *bobey*）と亀（Bantik 語では *timpunu*）の争いが中心のものである。それぞれ Kasimbaha テキスト、Boheng テキストと呼ぶ。

3.2. Bantik 語の特徴

ここでは、Bantik 語の音声・音韻と形態統語論について簡単に述べる。詳しくは内海（2005）を参照されたい。Bantik 語の音素は母音が五つ /i, e, a, o, u/, 子音が十四 /p, b, t, d, k, g, s, h, ʔ, m, n, ŋ, r, y/¹⁹ である。音節構造は V, CV, CVC のどれかである。Onset には /ʔ/ 以外のすべての子音が来られるが、coda は /n, ŋ, ʔ/ の三つの子音のみである。弁別的な高低アクセントを持つ。

Bantik 語の名詞は語根のみで用いられるものと、動詞や形容詞を形成する語根に派生接辞が付加して名詞として用いられるものがある。形容詞は語根のみで形容詞として用いられるものと接頭辞 *ma-* が語根に付加したものがあるが、いずれも時制による形態変化はない。これに対し、動詞は非過去形と過去形の二つの時制を持つ。また、動詞は一つ、二つ、三つのいずれかの態を持つ。一つの態しか持たないものは、intransitive verb、二つの態を持つものは transitive verb、三つの態を持つものは ditransitive verb と分類する。態には Active Voice, Passive Voice1, Passive Voice2 の三つがある。Intransitive verb は Active Voice しか持たない。Transitive verb は

¹⁸ 共に 1940 年代生まれの兄弟、Terok Mamengko 氏と Heis Mamengko 氏である。この場を借りて感謝をささげる。

¹⁹ /y/ は、硬口蓋近接音 [j] であるが、本論文では一貫して /y/ で表記する。

Active Voice と Passive Voice¹ の二つを持つ。Ditransitive verb は Active Voice, Passive Voice¹, Passive Voice² の三つの態すべてを持つ。これらの Voice を表すものを Voice 接辞と呼ぶ。その他に、派生的な動詞を形成する派生接辞があるが、派生接辞が付加しても、Voice 接辞が付加されることによって（あるいは Passive Voice² の場合は Voice 接辞が付加しないことによって）その動詞の態が示される。このような動詞の豊かな接辞のシステムはマナド方言にはない。

3.3. インドネシア語標準変種とマナド方言

Bantik 語の自然な発話において、インドネシア語の語彙はよく用いられる。それらの語彙がインドネシア語標準変種かマナド方言かはその語彙の発音、形態的特徴によって大体区別できる。例えば、インドネシア語標準変種においては /i, e, a, o, u, ə/ の六母音が存在するが、マナド方言においては /ə/ があまり出現しない。ほとんどの場合は単に脱落するか (/gərəza/ → /greza/, ‘教会’), 次の音節の母音に同化するか (/kəriŋ/ → /kiriŋ/, ‘乾いている’), /a/ に置き換わる (/bəgitu/ → /bagitu/, ‘このように’)。またマナド方言においては、インドネシア語標準変種の /i/ が /e/, /u/ が /o/ に置き換わる、二重母音が短母音になる (/au/ が /o/, /ai/ が /e/ に置き換わるなど)、語末の子音（特に閉鎖音と /h/）が脱落する、Bantik 語に存在しない子音音素 /ʒ, r, l/ がある、などの音声的あるいは音韻的な違いがあるのでマナド方言だと明確に判断できる場合が多い。インドネシア語標準変種で使用される、特に動詞に関わる接辞はマナド方言ではほとんど用いられないので、両者は区別しやすい。

しかし、どちらか分からない場合もある。マナド方言の語彙のすべてが上記のような変化を起こすわけではなく、インドネシア語標準変種の発音が保持される場合もあるからである。/məningal/ (亡くなる) はマナド方言でも /ə/ が保持される。以下でも触れるが、月の名に含まれる /ə/ も保持される（例えば 12 月はインドネシア語標準変種でもマナド方言でも /disembər/ と発音される）。このように、どちらか分からないものは以下ではすべてマナド方言として扱った。また、明確にインドネシア語標準変種においてのみ用いられると考えられる形式は見つからなかったため、以下で分析するテキストにおいては Bantik 語以外の要素をすべてマナド方言と解釈し、論じる。

統語的にも両者は異なった様相を見せる。一例を挙げると、所有を表す形式は両者で異なる。インドネシア語標準変種では「所有物—所有者」の語順を用いるが、マナド方言では「所有者—*punya* (持つ) —所有物」という語順を用いる²⁰。他にも、インドネシア語標準変種においては能動態（または actor focus, actor-orientation）と、受動態（または goal focus, object-orientation）の二つの態（または focus）が動詞に

²⁰ *punya* (持つ) は短縮され *pe* となることが多い。筆者のような外国人に対してはなるべくインドネシア語標準変種を使おうとする Buha 村の住民だが、筆者との会話においては圧倒的にマナド方言の形式で所有関係が表されていた。

付加される接辞の違いによって区別されうるが、マナド方言には態を表す形態上の区別はない。Actor-orientation と object-orientation を区別する手段としては主に語順を用いる (Prentice (1994: 429–431) 参照)。自動詞を形成する *ba*-²¹ や、非意図的な動作や、そのような動作によって起こった状態を表す *ta*-²² が動詞として機能する語根に付加されることはあるが、それ以外の接辞はいくつかの fossilized form を除き、基本的に付加しない。それ以外にも、他の品詞を派生する接辞もかなり少ない。インドネシア語標準変種に比べて孤立語としての様相が濃くなり、analytic な表現が多く用いられる。

これに対し、Bantik 語は、動詞に付加する接辞が 10 種類あり、そのうち 5 種類は非常に生産的に動詞を形成する語根に付加する。名詞を派生したり形容詞を派生したりする接辞も豊富である。

3.4. マナド方言の混入の扱い

二人以上の Bantik 語話者の会話を観察していると、ほとんどの場合マナド方言の語彙が一文につき一つか二つ挿入されるくらいであるが、文全体がマナド方言になることもある。Bantik 語の流暢な話者ではない人の発言の引用時にはマナド方言だけの文が Bantik 語の会話に挟まれていた。また、例えば *ini to* ‘this DP’²³ 「これなの?」、*pigi so* ‘go DP’ 「いってきなよ」など、マナド方言だけで形成されている文も特に短い文においては頻繁に観察された。

しかし、本稿が分析するデータに関しては、Bantik 語だけで形成されている文が過半数を占め、一つの文がすべてマナド方言だけで形成されている例はなかった。これは、調査者が「Bantik 語の発話を求めている」ことを明確に述べたため、皆がなるべく Bantik 語だけで話そうと意識したからだろう。それにもかかわらず、マナド方言の語彙は混入している。純粋な Bantik 語の発話が求められているのにもかかわらず出現する要素を以下では分析の対象とする。マナド方言の語彙は、二語以上続けて出現することもあったが、ほとんどの場合、一語ずつ現れる。

このようなマナド方言の語彙の混入は code-switching ととも borrowing ととも解釈できよう。両術語の定義は様々であり、恣意的な分類と考えられる場合もあるが、以下、本稿ではこの現象を code-switching と呼ぶことにする。

²¹ インドネシア語標準変種の *ber-* と語源は同じだが、機能はかなり異なる。‘possess, contain, use, produce, resemble’ などの意味を動詞として機能する語根に付加する (Prentice 1994: 431–432)。

²² インドネシア語標準変種の *ter-* と語源が同じであり、機能も似ている (Prentice 1994: 433)。

²³ DP としたのは discourse particle の略。*to* はここでは疑問のマーカースとして機能している。次の例の *so* は促すときなどに用いられる。マナド方言だけでなく、インドネシア語標準変種でも Bantik 語においても様々な discourse particle が用いられるがこれらの意味・機能はとらえにくいので、本稿ではすべて DP とだけ記した。マナド方言の discourse particle の記述は Stoel (2000) を参照のこと。

3.5. ‘code-switching’ と「借用語」

上に述べたように、本稿では、自然な談話において混入されるマナド方言を ‘code-switching’ と呼ぶ。しかし、Bantik 語には、古くからマナド方言と接触していたため、マナド方言からの語彙や、ポルトガル語やスペイン語からマナド方言を通じて流入した語彙がある。これらのうち、以下の条件のどちらかを満たすものは、本稿での ‘code-switching’ には分類せず、「借用語」として扱う。「借用語」の条件は

1. Bantik 語の音素が用いられ、Bantik 語の音節構造を持つ。
2. マナド方言の音声的特徴を持っているが、Bantik 語の接辞が付加された形で現れる。

以上の二つである。1 に関して例を挙げる。マナド方言には trill の /r/, lateral の /l/ があるが、これらの音素は Bantik 語の音韻構造にそって発音されると両者とも flap の /r/ で代用される。例えば /pukul/ は時間の単位²⁴であるが、Bantik 語に導入されて長期間たったこの語は、/pukuru/ と発音される。/botol/ も /botoro/ となる。lateral が flap に変化し、最終音節の母音が flap の後に繰り返されるという規則的な変化が観察できる。

2 に関しても述べると、「歌う」という意味を表す /kantar/ はマナド方言でも用いられる形である。マナド方言で動詞として用いられるときはそのままの形で用いられるのに対し、Bantik 語として動詞として用いられるときは必ず Bantik 語の動詞を形成する接辞 /ma-/ が付加して /ma-kantar/ となって動詞として用いられる。/ma-kantar/ は Bantik 語の音素にはない trill を用いているが、Bantik 語の形態論の体系に組み込まれて用いられている場合は本稿においては「借用語」として扱い、以下で論じる ‘code-switching’ とは区別する。

ここで言う「借用語」と以下で述べる ‘code-switching’ の区別も明確にできるわけではないが、暫定的に本稿では Bantik 語に流入して定着している語彙（つまり「借用語」と、たまたま自然な発話において混入した語彙（‘code-switching’ が起こった例）を区別し、後者に焦点を当てて論じたい。

4. 高齢層の Bantik 語に見られるマナド方言への code-switching

上で述べた通り、高齢層の Bantik 語話者間で自然に選択されるのは Bantik 語であり、高齢層の第一言語は Bantik 語であると言える。しかし高齢層が Bantik 語を話すときにもマナド方言はかなり混じる。このセクションでは高齢層の Bantik 語の narrative speech を分析し、どのようなマナド方言の要素が Bantik 語に混じるのかを考察する。

本稿では code-switching の理由を次の二つに分けて考察して行きたい。第一にマナド方言を発話するときに頻出する語彙が Bantik 語の会話の中でも出現した場

²⁴ 例えば五時は /pukul lima/ ‘hour five’ のように表す。

合で、これは常々使用頻度の多い語彙が発話されやすいという理由により code-switching が起こったものである。第二に lexical gap による code-switching が起こった場合で、ある概念を表す語が Bantik 語にないのでマナド方言の語彙が使用される。以下では第一の理由から code-switching が起こった例、第二の理由により code-switching が起こった例に分けて例を挙げる。以下の例文においては、small capital でマナド方言への code-switching が起こった語を表すことにする。

4.1. 使用頻度が高いマナド方言の語彙への code-switching

以下に述べる例は、単にマナド方言の語彙の方が話者にとって思い浮かびやすく、対応する Bantik 語があるのにもかかわらず、マナド方言が選択されたと考えられる例である。談話的機能を持つマナド方言の要素が使用される例と、それ以外の例に分けて記す。

4.1.1. 談話的機能を持つ要素に関する code-switching

berarti は「意味」を表す語根 *arti* に接頭辞 *ber-* (自動詞も形成するが、ここでは「～を所有する」という意味を表す) が付加したものである。マナド方言においていくつかの用法がある。第一に「意味を持つ」という意味で使われる。第二に、文副詞的に「つまり、言い換えると」といった意味を表す。第三に filler としての用法で、明確な意味を持たず、言い換えをするわけでもなく、談話の沈黙を埋めるために用いられる。これらの用法のうち、第一の用法はテキスト中に現れなかったが²⁵、派生的な用法と考えられる第二と第三の用法は十四回ほど観察できた。

以下の例 (1) と (2) は異なる人物の談話から取った例だが、それぞれ *berarti* よりも前におかれた節の内容を、その後に置かれた節が言い換えている。例 (3) と (4) は同じ人物の談話だが (例 (2) と同)、filler としての *berarti* の用法である。

- (1) bo ie e pa-MAKE ada=bo WAKTU nu pai seke, BERATI INI
and this DP PAN-use if time NU exist enemy that.is this
pa-MAKE ma-hi-sakuru
PAN-use MA-HI-war

‘And this is used when there are enemies, that is, this is used for fighting.’ : A テキスト

- (2) uri=ne ‘ako te, BERARTI ikau ma-ka-dea? si-ma?
word=NI.3sg go TE that.is I-3sg MA-KA-find SI-mother
nu-ana?=nu’
NU-child=NI.2sg

‘Go, which (=going) means, you can find your child’s mother.’ : Kasimbaha テキスト

²⁵ Bantik 語において「意味」を表す語は *sirigi?* である。

- (3) 'tou ada taya BERARTI ikau paŋ-aden=ku si-uei bataŋ yo
 but if not filler I.2sgPAN-name=NI.1sg SI-rattan thick so
 iŋene kudi? m-abi? te.'
 like.that then MA-climb TE
 'But if (you) don't, it means, you will be called the thick rattan by me, so (the
 situation being) like this, climb': Kasimbaha テキスト
- (4) 'yo uri?=ne BERARTI 'ikau aden=nu aya i-uei tinenden,
 then speak=NI.3sg filler I.2sg name=NI.2sg not I-rattan graceful
 ka i-uei bataŋ.'
 because I-rattan thick
 'Then he said, that is, 'You, your name is not the graceful rattan, because (you are) the
 thick rattan.' : Kasimbaha テキスト

第二の「言い換え」を示す Bantik 語の語彙あるいは成句にどういったものがあるかの全体像は調査不足で分からないが、少なくとも、指示詞の *ene* 'that' の後に言い換えた要素を置くことにより、「言い換え」ができることは観察済みである。また、filler として Bantik 語話者がよく用いるのは *e* 'DP', *yo* 'then' などである。従って、マナド方言の *berarti* は lexical gap が理由で用いられているわけではない。ここでは普段言いなれているマナド方言の「言い換え」が後続していることを示したり filler として機能たりする語を、マナド方言を話すときに日常的に高い頻度で用いているため、Bantik 語を話す場合にも使用されるのであろう。

berarti の第三の用法と同様、filler としてマナド方言で使用される *kaŋ* が使用されている例を以下の (5) に挙げる。

- (5) maya=ne KAŋ kite? ma-tiho?, adiei ma-kude-kude
 all=NI.3sg filler I.1pl.INC. MA-know do.not MA-RED-tease
 ada pai SALAH
 if exist mistake
 'All of it (=the story) we know, don't tease me if there is a mistake.' : Kasimbaha テキスト, 民話の導入部

また後述の例 (11) 及び、以下の例 (6) においては、同じく談話的機能を持つマナド方言の要素 *day*²⁶ が用いられている。例 (7) は確認を得るために用いられる *to*²⁷ が用いられている例である。

²⁶ Stoel (2000) によると、*day* は先行文脈を foreground する機能がある。「先行文脈を踏まえた叙述をする、念を押す、話題を変える」等の場合に用いられるとしている。

²⁷ Stoel (2000) によると、後行の談話につながる発話を background する機能がある。念を押しつつ、次の話題につなげるときなどに使われる。

- (6) poposaden kite? ie t<im>ondo, ni-bajun, na-idao? su rou ie daj.
group.work I.1pl.INC this <IM>practice NI-establish NA-reach SU day this DP
'This group work of ours has come into practice, or established, until today.'
- (7) 3ADI m-ako te nu dua-m-puro pitu su taon=ne to,
then MA-go TE NU two-NU-ten seven SU year-NI.3sg DP
'Then it has continued for twenty-seven years.'

Bantik 語独自と思われる discourse particle には, *e* があるが, それ以外に元来他の意味・機能を担っている要素が discourse particle として用いられるケースがある。継続アスペクトを表す *ken*, 完了アスペクトを表す *te*, '既に' という意味を表す *mai*, 'すべて' という意味を表す *ha* などである。これらの Bantik 語独自の discourse particle を使わなくなり, 代わりにマナド方言への code-switching が起きている。理由としては, マナド方言使用時にこれらの談話的機能を持つ要素を多用するため, Bantik 語発話時においても使用されることが多いのだと考えられる。

4.1.2. 使用頻度の高い接続詞と許可を表す要素に関する code-switching

以下の例 (8), (9) では「譲歩」を表すマナド方言の語, *sedangkan* 'whereas' が用いられている。Bantik 語にも *manen* 'although, whereas' という譲歩を表す語があり, 下記の例 (8), (9) の場合, この *manen* が問題なく使用できる文である。例 (10) に示した文は (8) の *sedangkan* を *manen* で置き換えた文であるが, コンサルタントによると適格な文である。それにもかかわらず, マナド方言の *sedangkan* が使用されている。*sedangkan* は, マナド方言を用いた会話において使用頻度が高いため, Bantik 語の発話において code-switching が起こったと考えられる。

- (8) SEDAJKAN gare papondo bo ene MUSTI pa-nuhu?-an.
although only bamboo and that must PAN-fill-AN
'Although (it is made from) only bamboo, it must be filled (with water).': Kasimbaha テキスト
- (9) SEDAJKAN ie bo pitu, ada mai gare dadua, tou ie bo pitu e.
whereas this BO seven if again only two but this BO seven DP
'(He ordered to choose the right one) Whereas there are seven (doors), if (there were) only two (I could choose), but there are seven.': Kasimbaha テキスト
- (10) manen gare papondo, bo ene pa-nuhu?-an.
whereas only bamboo and that PAN-fill-AN
'Whereas (it is made from) only bamboo, it must be filled (with water).'

許可を表す *bole*²⁸ もマナド方言における使用頻度が高いため, Bantik 語の談話に

²⁸ インドネシア語標準変種では [boleh] と発音される。例 (11) の文中の *bole* は Bantik 語の *m-uari* (～できる) と置き換えても適格な文となる。

用いられるのだと考えられる。*bole* は許可を求めるとき、そして許可を与えるときに用いられ、使用頻度が高い。以下の例 (11) は民話テキスト中の会話文において *bole* が現れている例である。

- (11) 'BOLE, saha-ne ikau PASADIA rumu?, rumu? DAŋ.
may condition=NE I.2sg prepare moth moth DP
'You may', provided that you prepare moth, yes, moth.': Kasimbaha テキスト

4.2.1. lexical gap による code-switching

Bantik 語に存在しないが、日常生活に必要な語彙はマナド方言が用いられる。時間に関する語彙は、通常マナド方言の語彙を用いる。月の名はすべてマナド方言 (/3anuari/ 一月, /disember/ 十二月等) である。以下の例 (12) では /disember/ が用いられている。Bantik 語では十二月は 12 番目の月, *bulan ka-puro-dua* 'month KA-ten-two, the twelfth month' という言い方もあるが、日常会話においてはもはやそのような言い方は減多になされず、マナド方言を用いているようだ。

- (12) SUPAYA kite? ma-idaŋ? DISEMBER ada pai i-tou maŋ-ara?
so.that I.1pl.INC MA-reach December if exist I-PRO MAN-take
'so we reach December (working) if there is someone who takes (us) : M テキスト

この他, *greza* '教会', *hidup* '人生', *binatay* '動物', *sraŋga* '虫', *bambu* '竹', *skaraj* '今' 等も lexical gap によって code-switching が起こった例である。Bantik 語には「動物」「虫」「竹」といった上位概念を表す語彙が少ない。(例えば Bantik 語においては各種の竹それぞれに名前が付いており、それらを総称する用語がない。)'今' という意味は基本的なようだが、Bantik 語においてはこの意味のみを表す形式はない。「現時点」を表すときには、事物を指示するときにも用いられる近称指示詞、「これ」に近い意味を持つ *ie*²⁹ を用いるしかない。マナド方言の *skaraj* を用いるのは時を指していることを明示するためかもしれない。

4.2.2. モダリティを表す要素に関する code-switching

言語接触あるいはバイリンガリズムにしばしば見られるように、モダリティを表すマナド方言の要素を用いることも多い。以下の例 (13) においては '当然' という意味を表す *tantu*³⁰, 例 (14) においては '多分' という意味を表す *kira-kira*, 例 (15) においては '結局' という意味を表す *akhir* が用いられている。例 (13) における *tantu* と例 (15) における *akhir* は、マナド方言においては clitic の *nya*³¹ が後続する

²⁹ 現在のところ, *ie* は場面指示としての用法は確認できているが, 文脈指示に関しては確認できていない。

³⁰ インドネシア語標準変種においては [təntu] と発音され, *tentu* と綴られる。

³¹ *nya* は三人称属格, goal focus 構文における三人称の agent を表したり, actor focus 構文にお

ことにより文副詞として機能するが、Bantik 語使用時には、マナド方言の *nya* に対応する、Bantik 語の clitic の *ne*³² (同じく文副詞を形成する機能を持つ) が後続している。

- (13) yo TANTU=*ne* kite? pona-pona pa-idao? bua nu tahun pida
 then of.course=NE I.1pl.INC RED-before PA-tell from NU year how.many
 ‘Yeah, of course we are told (about the group work) from long ago, from which year (we don’t remember)’ : D テキスト
- (14) KIRA-KIRA nu bua nu tahun ma-hibu siou-hatusu? bo
 about NU from NU year one-thousand nine-hundred and
 uaru-m-puro,
 eight-NU-ten
 ‘About from the year 1980,’ : D テキスト
- (15) r<im>oaj mai side dua AKHIR=*ne* side dua n-uari bo
 <IM>come.out COMP I.3pl two at.last-NE I.3pl two NA-begin BO
 na-kabiŋ
 NA-marry
 ‘(He) had come out then they two began (to get on well with each other) and married.’ : Kasimbaha テキスト

4.2.3. マナド方言の分析的な表現への code-switching

用いられているマナド方言の語彙のうち、対応する Bantik 語の synthetic な表現はあるものの、分析的な表現がないものについて、三つの例を挙げて論じる。

頻度を表す表現のうち、‘いつも’ という意味を表すマナド方言の語彙 *salalu*³³ も Bantik 語の会話の中によく用いられる。以下に *salalu* が現れる二つの文例(16), (17)を示す。(後述の例(22)も参照。)

- (16) SALALU kite? ma-tiaha? doiti? ŋasa.
 always I.1pl.INC MA-share money much
 ‘we always share much money.’ : M テキスト
- (17) yoka kite? KAJ SALALU ma-hisabu pa-hia-rou=*ne*
 then I.1pl.INC DP always MA-meet PA-HIA-day-NE
 ‘then, we always meet everyday’ : K テキスト

いて三人称の object を表すのが基本的な用法だと考えられるが、その他に definiteness を表したり動詞や形容詞を名詞化したり文副詞を形成することもある。

³² *ne* が、ここのように、名詞あるいは副詞に後続して主に文副詞を形成する clitic の場合は、NE とグロスした。*ne* は三人称単数の属格を表す clitic として機能することもあり、その際は NI.3sg とグロスしている。文副詞を形成する clitic は、三人称単数属格を表す clitic から派生した用法であると考えられるが、ここではグロスの分かりやすさを重視し機能面から区別した。
³³ インドネシア語標準変種では [səlalu] と発音され、*selalu* と綴られる。

現在の Bantik 語において、*salalu* に当たる analytic な要素はない。「常に～する」という意味を表すには動詞を習慣アスペクトの「C1³⁴ + /a/ + 語根」の形態、あるいは反復アスペクトの「σ1³⁵ + C2V2 + 語根」の形態にすればよい。例えば *ma-maidi?* ‘to wipe’ より *ma-m-a-maidi?* ‘always wipe, to wipe habitually’ という習慣アスペクトが形成され、*ma-babiga* ‘to speak’ より *ma-babi-babiga* ‘to speak repeatedly, always speak’ という反復アスペクトの動詞が形成される。この動詞の形で「常に、いつもある動作を行う」という意味が伝わるのである。または、*buntia* ‘every’ という要素を用いて習慣的あるいは反復してある動作が行われることを表すことができるが、*buntia* は単独では用いられず、常に「*buntia* + *nu* + 時を表す名詞句」の形で示される。例えば *buntia nu-rou-ne* ‘every NU-day-NE’ で毎日、*butia nu-taon-ne* ‘every NU-year-NE’ で毎年、といった具合である。このように、Bantik 語には「常に」という意味のみを analytic に表す手段はない。この lexical gap を埋めるために、*salalu* が用いられるのだと考えられる。

次に、*turus*³⁶ について述べる。これは第一に‘まっすぐな’という形容詞としての用法を持つが、第二に動詞として用いられ‘そのまま進む’あるいは‘(そのまま有る事態が) 続く’という意味を表し、第三に助動詞あるいは動詞の補助として用いられ‘(そのまま動作を行い) 続ける’³⁷ という意味を表す。このうち、第二と第三の用法が、Bantik 語テキスト中に頻繁に観察された。以下の例のうち (18) に挙げた文は、*berenan* ‘work’ という名詞の後に置かれており‘続く’という意味を持つ動詞として機能していると分析できる。例 (19) と (20) は動詞の後に置かれ、動詞で表される動作が引き続き行われることを示している。

- (18) *berenan=ne sada? nu mai ma-dodio? ene berenan=ne TURUS.*
 work=NL.3sg after NU again MA-adolescent that work=NL.3sg through
 ‘His work after (he) became an adolescent, his work went on the same.’ : Kasimbaha
 テキスト
- (19) *ana? kokonio? ken ana? k<um>aha-kaha? TURUS.*
 child little KEN child <UM>-RED-cry through
 ‘The child was still small, the child cried and cried.’ : Kasimbaha テキスト
- (20) *side e, rou bo hibi, uei m-abi TURUS m-abi? TURUS*
 I.3pl DP day bo night rattan MA-climb continue MA-climb continue
 ‘Day and night, they, the rattan continued climbing and continued climbing.’ :
 Kasimbaha テキスト

³⁴ C1 はここでは語根の最初の子音を表す。

³⁵ ここでは σ1 は語根の最初の音節を表す。

³⁶ インドネシア語標準変種においては [turus] と発音され *terus* と綴られる。

³⁷ インドネシア語標準変種においては第三の用法の /turus/ は動詞の前に置かれことも後に置かれることもあるが、マナド方言においてはほとんどの場合動詞の後に置かれるようである。筆者のデータにおいてはすべて動詞の後に現れている。

Bantik 語においては、継続を表すためには、上記で挙げた反復アスペクトの形を使用するか、反復アスペクトと同じく「σ1 + C2V2 + 語根」の重複形をとるが時制を表す接辞 *ma-/na-* が付加されない継続アスペクトの形（例えば *ma-saka* ‘ascend’ から *saka-saka*）を用いればよい。しかし、同じような意味を表す analytic なマナド方言の要素 *urus* が好んで用いられる。分析対象のデータでは Kasimbaha テキストに十二回と頻出し、Boheng テキストには二回出てくるだけであるが、自然な Bantik 語による会話において、頻繁に耳にする。データ中には観察されなかったが、第一の形容詞的な用法で ‘まっすぐな’ という意味を表す *urus* も出てくるので、マナド方言の多義性をそのまま Bantik 語の会話に持ち込んでいると言える。

最後に、「義務, 必要性」を表すマナド方言の *musti*³⁸ と *purlu*³⁹ の使用について述べる。これらはある動作を行わなければならないことを示す助動詞で、動詞の前に置かれる。このような analytic な手段で「義務」や「必要性」を表す方法は Bantik 語にはない。調査時に、これらのマナド方言に対応する Bantik 語をいくら尋ねても採集できなかった。しかし、使役などを表す接頭辞 *pa-* が付加したときに、「義務, 必要性」を表す例は調査時の作例からも、談話テキストからも見つかっている。例 (21) の *pam-bere* と (22) の *pa-ka-pia* と *pa-ka-tiho?* がその例である。

(21) *ikau pam-bere ka-ene-nu ma-ka-dea? doiti?*
I.2sg PAN-work in.order.that MA-KA-find money
‘You should work, in order to find money’: 作例

(22) *su poposaden pa-ka-pia, pa-ka-tiho? mam-bere SUPAYA SALALU*
SU group.work PA-KA-good, PA-KA-know MAN-work so.that always
pai i-tou maŋ-ara?
exist I-PRO MAN-take
‘In the group work, (we have to be) good, (should) know (how to) work so that there is always someone who takes us (to request the job).’: M テキスト

このように、「義務, 必要性」を表す手段は Bantik 語に存在すると考えられるのに、語彙調査時には接頭辞 *pa-* による表現は答えてもらえない。またマナド方言の *musti* や *purlu* は Bantik 語の会話において頻出する。今回の分析対象の民話テキスト中に *musti* は例 (23) と (24) に示した二回のみ出現したが、調査時の作例には *purlu* が出現する (25) のような例が多数ある。

(23) *napa-bo kite? pa-ŋkere-an MUSTI ma-biou, manen taya*
because I.1pl.INC PAN-request-AN must MA-story although not

³⁸ インドネシア語標準変種においては [məsti] と発音され、*mesti* と綴られる。

³⁹ インドネシア語標準変種においては [pərɭu] と発音され *perlu* と綴られる。マナド方言においては標準方言と同じ発音 [pərɭu] が用いられることもある。

ma-tommodo? tou pandam-en te.

MA-perfect but try-AN TE

‘Because we are requested, (I) must tell a story although it’s not perfect but (I) will try.’ : Kasimbaha テキスト, 民話の導入部

(24) ‘ikau MUSTI t<um>umpa te’

I-2g must <um>jump TE

‘You must jump’ : Kasimbaha テキスト

(25) isie gare PURLU na-idao? su-benaj

I.3sg only must NA-reach SU-port

‘S/he only had to arrive at the port’ : 作例より

Bantik 語話者が一般に「義務, 必要性」を表す要素を挙げることができず, マナド方言の *musti* や *purlu* を挙げ, Bantik 語使用時に頻繁に用いるのは, 以下の理由によると考える。接頭辞 *pa-* は主に使役動詞を形成する派生接辞だが, 形容詞を形成する語根に付加して他動詞を形成する場合もある (*ma-darindin* ‘cold’ → *ma-pa-darindin* ‘to make something colder’)。また, 非常に良く似た形の接頭辞 *paN-* は, applicative verb を形成したり, 道具を主語に取る動詞や場所を主語に取る動詞を形成したりする。従って /pa/ の音形は非常に出現頻度が高く, 様々な機能を担っている。「義務, 必要性」という意味はその中の一つにしかすぎないので, *pa-* を動詞の語根に付加しただけでは「義務, 必要性」の意味は成立しない。あくまでも前後の(特に先行の)文脈があってはじめて成立するのである。

高齢層の Bantik 語話者は「接頭辞 *pa-* + 語根」の形式が「義務, 必要性」を表すことをわきまえている。だからこそ, 例 (21) や (22) のような例が作られたり自然な発話として出てきたりする。しかし, この形式の意味のうち「義務, 必要性」は通常意識されていないので, 語彙調査時にマナド方言の「義務, 必要性」を表す助動詞に対応する Bantik 語を聞くと, 「ない」と答えてしまう。自然な談話においても「義務, 必要性」を明確に表そうとするときはマナド方言の助動詞を使用してしまうのであろう。

最後に補足として *pake* について述べたい。*pake* はインドネシア語標準変種の *pakai* ‘to use’ からきたもので, マナド方言においては ‘~を使う’ という動詞としての用法だけではなく, 動詞の前に置かれて ‘~と一緒に’, ‘~を用いて’ 等の意味を表す助動詞的な要素としても機能する。Bantik 語のテキストの中では常に主に他動詞を形成する接頭辞 *maN-/naN-* と共に用いられる。この接頭辞の /N/ は語根の最初の子音が鼻音化するか, 最初の子音と同じ位置で調音される鼻音が挿入されることを示している。*pake* の語頭の子音 /p/ は鼻音化して *ma-make* (非過去形) あるいは *na-make* (過去形) の形で用いられる。従って, これは本稿における「借用語」に分類するべきものである。しかし, この要素が「借用語」として使用されるようになった理由も, 上記三例の code-switching と同じく, analytic な表現

を好む傾向と同様ではないかと考えられる。Bantik 語で ‘～を使って’ という意味を表すためには、筆者が instrumental verb⁴⁰ として分析する [paN- + 語根] の形を取ればよい。他動詞を形成する語根に限れば、この instrumental verb は大変生産的に派生される。しかし、‘～を使って’ という意味を明確に表す analytic な要素の *pake* が好まれて Bantik 語の会話中に用いられる。例 (26) にはこの *pake* に、上記の instrumental verb を形成する接頭辞 *paN-* が付加されて用いられている。

- (26) bo ie e pa-MAKE su-insau? ada=bo WAKTU nu pai seke
and this DP PA-use SU-one if time NU exist enemy
‘And this is used to get together when there are enemies.’ : A テキスト

このようになぜ analytic な要素を好んで code-switching (あるいは借用語として導入) するのかについて、まだ証拠立てて説明することはできない。一つの仮説として、以下の説明を挙げておく。synthetic な接辞に比べ、analytic な要素は認識しやすく認知的に顕著⁴¹ である。言語接触が起こるとき、一方の analytic な要素がより認知的に顕著となり、素早く習得されて頻繁に用いられ、そして他方の言語にも code-switching あるいは借用語という形で影響を与えるのではないだろうか。

5. 若年層の Bantik 語

若年層は、1000 語の基礎語彙を調査している段階で、「分からない」という単語が数多く見られた。語彙数がかなり少なくなっていることが分かる。また、形態、統語の各側面の調査では、何人かの調査協力者の中で意見が分かれたり、数日後の調査の際に、前回と一致しないデータを提示したりすることがよくあった。個人間だけでなく、同一個人においても文や語形成の適格性に関する判断のばらつきが大きいのである。Bantik 語の直感が働きにくくなっており、「言語磨耗」と呼ばれる状態が起きていると考えられる。ここでは、若年層の Bantik 語が見せる、伝統的な Bantik 語とは異なる特徴をいくつか取り上げ、簡単に述べる。詳しくは Utsumi (2002) を参照していただきたい。

5.1. 若年層の Bantik 語における形態音韻的な変化

5.1.1. 母音連続の解釈

Bantik 語の音韻構造には、二重母音を設定する理由はない。たとえば、語根の第一音節すべてと第二音節の onset と nuclear のみが繰り返される重複形がある。このとき、*serei* ‘to see’ のように CV.CV.V の構造を持つ語根の場合、最初の音節の

⁴⁰ 他のフィリピン諸語では Instrumental Voice, Instrumental Focus などと呼ばれることが多いが、筆者は内海 (2005) において、派生的な動詞と捉え、「道具」を表す名詞句を主語に取る instrumental verb として記述した。

⁴¹ ここでの「認知的に顕著」は、Langacker (1991, 1993, 1999) などで定義されている cognitively salient の意味で用いている。

/se/ と次の音節の /re/ が繰り返される。このとき、若年層の話者は最後の音節の /i/ を次末音節の母音 /e/ と結合させ、最後の音節に /ei/ という二重母音があるという解釈を起こす。これは /ou/ の母音連続が見られるときも同様である。それ以外の母音連続、例えば /oi/, /ui/, /au/ のときは二重母音と解釈しない。高齢層の話者は、どんな母音連続の時でも、二重母音と解釈することはない。上に述べた重複形が高齢層と若年層の話者でどのように異なるかを表 1 に示す。表中の形態は反復アスペクトを示す。表の中では Voice を表す接中辞の *-um/-im-* や接頭辞の *ma-/na-*, *maN-/naN-* が付加した動詞が示されている。表中の OB は Old Bantik の略で高齢層の Bantik 語、YB は Young Bantik⁴² の略で若年層の Bantik 語の音形である。上の段は年代によって音形が違う例、下の段は一致している例である。

表 1 母音連続の解釈の違いを示す重複形

root	non-past form	meaning	OB RED form	YB RED form
serei	s-um-ere	see	s-um-ere-serei	s-um-ere-serei
oyou	m-oyou	swim	m-oyo-oyou	m-oyou-oyou
bokou	ma-mokou	wash	ma-moko-mokou	ma-mokou-mokou
kontoi	k-um-ontoi	step on	k-um-onto-kontoi	k-um-onto-kontoi
turau	ma-turau	live	ma-tura-turau	ma-tura-turau
untui	ma-ŋuntui	imitate	ma-ŋuntu-ŋuntui	ma-ŋuntu-ŋuntui

5.1.2. 鼻音の発現

Bantik 語においては、接頭辞が語根に付加するときに、しばしば語根の最初の子音が鼻音化したり最初の子音と同じ位置で調音される鼻音が挿入されたりする。このように鼻音化あるいは鼻音の挿入を引き起こす要素には二種類ある。第一の鼻音を /N1/ と記す。/N1/ は、/r, h/ の二つの音素の前では実現しない。母音の前では /ŋ/ として実現する。閉鎖音と /s/ の前ではこれらの子音と同じ位置で調音される鼻音に変化させるか、同じ位置で調音する鼻音が挿入されるという形で実現する。この鼻音は、他動詞を主に形成する接頭辞 *maN-/naN-* と applicative verb, instrumental verb, locative verb を形成する時に用いられる接頭辞 *paN-* が付加するときに現れる。この /N1/ の鼻音が付加した場合の変化を、接頭辞 *maN-/naN-* が語根に付加した場合の例に表 2 に示す。/N1/ の鼻音に関しては、高齢層と若年層で変化の仕方は一致している。接頭辞 *maN-/naN-* は他動詞を形成すると述べたが、他に主に自動詞を形成する接頭辞 *ma-/na-* があり、同じ語根でも /N1/ が存在するかしないかで動詞の意味と態の数が変わってしまう。applicative verb など、/N1/ があって始めて派生が完成する。大変重要な機能を持っているために、Bantik 語の使用機会が少な

⁴² この Young Bantik という用語は、Schmidt (1985) において用いられている Young Dyirbal という用語に倣った。

くなっている若年層も伝統的な形を保持しているのであろう。

表2 /N1/ が現れたときの語形：接頭辞 *maN-/naN-* が付加した動詞の例

root	non-past form	past form	meaning
aŋkedeʔ	ma-ŋaŋkedeʔ	na-ŋaŋkedeʔ	to stop something
boheʔ	ma-moheʔ	na-moheʔ	to write
tereseʔ	ma-nereseʔ	na-nereseʔ	to find fault
diŋan	ma-niŋan	na-niŋan	to drive
sogere	ma-nogere	na-nogere	to drop something
karimuʔ	ma-ŋarimuʔ	na-ŋarimuʔ	to make

これに対し、本稿で /N2/ と呼ぶ、鼻音の挿入を起こす要素が含まれた語に関しては高齢層と若年層でかなり異なった形成が見られる。/N2/ は /r, h/ 以外の子音で始まる動詞を形成する語根に付加し、その語根で表される状態をよく引き起こす人の属性を表す形容詞を派生する *tabaN-* と、形容詞を形成する語根に付加してその語根で表される状態が望ましい状態まで到達していないことを示す *maN-* はこの /N2/ の要素を持つ。/N2/ は /r, h/ の子音の前で発現しないことは /N1/ と共通しているが、母音の前でも発現しないことは /N1/ と異なる。また閉鎖音と /s/ の前に置かれたとき、子音の鼻音化は起こさず、同じ調音点で調音される鼻音の挿入が見られる。若年層の話者は、この /N2/ をどんな環境においても全く発現させないのである。高齢層における /N2/ が含まれた語彙の例を表3に挙げる。語根 *pedekeʔ* と *kapara* は *maN-* が付加すると /N2/ が鼻音として発現するが、次の二つの語根 *igahaʔ* と *risiŋ* は /N2/ が発現しない。二重線の下の子音の語根 *bataʔ* と *doiʔ* は *tabaN-* が付加して /N2/ が発現する例、最後の二つの語根 *hompoŋ*, *regei* は /N2/ が発現しない例である。若年層はこれらすべての例において /N2/ を発現させなかった。

表3 /N2/ が現れたときの語形：接頭辞 *maN-* と *tabaN-* が付加した語の例

root	basic form	meaning	derived form	meaning
<i>pedekeʔ</i> <i>kapara</i>	ma- <i>pedekeʔ</i> ma- <i>kapara</i>	short ma-ŋ- <i>kapara</i>	ma- <i>pedekeʔ</i> thick	little bit short little bit thick
<i>igahaʔ</i> <i>risiŋ</i>	ma- <i>igahaʔ</i> ma- <i>risiŋ</i>	fast sour	ma- <i>igahaʔ</i> ma- <i>risiŋ</i>	little bit fast little bit sour
<i>bataʔ</i> <i>doiʔ</i>	ma- <i>bataʔ</i> ma- <i>doiʔ</i>	lose dislike	taha-m- <i>bataʔ</i> -en taha-n- <i>doiʔ</i> -an	frequently lose choosy
<i>hompoŋ</i> <i>regei</i>	h-um- <i>ompoŋ</i> r-um- <i>egei</i>	sit laugh	taha- <i>hompoŋ</i> -an taha- <i>regei</i> -an	always sitting easy to laugh

5.2. 形態論的規則に基づく新しい派生語の生成

若年層は実在する Bantik 語の派生接辞を極めて生産的に用い、高齢層が存在すると認めない多数の語を、存在していると答える。しかし、それらの意味や文中における用法は自身もはっきりせず、ある日には存在すると認めた語の意味を次の日に答えられないというようなことも頻繁に観察された。

例えば、applicative verb を形成する接頭辞 *paN*-⁴³ は他動詞を形成する語根の三割程度にしか付加しない。Applicative verb は Active Voice, Passive Voice1, Passive Voice2 の三つの態を持つ。この接頭辞 *paN*- は instrumental verb と locative verb を形成する場合にも用いられるが、これらの動詞はかなり生産的でそれぞれ他動詞を形成する語根の9割近くを派生させる。しかも、instrumental verb は「接頭辞 *paN*- + 語根」の形態をとり、applicative verb の Passive Voice2 と全く同じ形態を持ち、locative verb は「接頭辞 *paN*- + 語根 + 接尾辞 *-AN*」の形をとり、applicative verb の Passive Voice1 と全く同じ形態をしている。しかし、instrumental verb と locative verb は対応する Active Voice (接頭辞 *ma-/na-* が付加した形)を持たない。若年層は、高齢層の話者にとっては存在しない applicative verb の Active Voice を次々と形成し、それを用いた文を作成する。しかしそれらに与えられる意味や用法が個人間で異なったりあるいは同一個人であっても時間がたつと変化したりし、安定した意味・機能を認めることはできない。applicative verb のうち、高齢層が実在すると認めた語と、若年層が新しく作り出した意味・用法に関する判断が揺れる派生語の例を表4に挙げる。表中の *st* は something の略、*sw* は somewhere の略である。上段は *paN*- が付加した applicative verb が実在する例、下段は高齢層の話者には実在すると認められない語の例で、星印を付けて実在しないことを示した。下段の表中の applicative verb の意味は若年層が答えた意味であるが、高齢層はこのような意味を持つ語の存在を認めない。

表4 *paN*- が付加した applicative verb : 実在の語と実在しない語

root	basic verb	meaning	applicative verb	meaning
bohe?	ma-mohe?	write	ma-pa-mohe?	write with st
pareŋ	ma-mareŋ	take st	ma-pa-mareŋ	take st with st
turi	ma-nuŋi	touch	ma-pa-nuŋi	touch with st
susu	ma-nusu	pierce	ma-pa-nusu	pierce sw
dahuŋ	man-dahuŋ	ma-pan-dahuŋ	sew	sew on st
ki?aŋ	ma-ŋi?aŋ	lift	*ma-pa-ŋi?aŋ	*lift with st
tekoso?	ma-nekoso?	steal	*ma-pa-nekoso?	*steal with st
gogaha?	maŋ-gogaha?	break	*ma-pa-ŋogaha?	*break with st
kaŋimu?	ma-ŋaŋimu?	make	*ma-pa-ŋaŋimu?	*make with st
kara?	ma-ŋara?	scoop out	*ma-pa-ŋara?	*scoop out sw

⁴³ *paN*- はマナド方言にも存在するが (Prentice 1940: 428–429)、機能は全く異なる。マナド方言においては、動詞を形成する語根に付加し、動詞で表される動作をする人を表す語を形成する。

この他、「被害」の意味を示す「接頭辞 *ka-* + 語根 + 接尾辞 *-AN*」の形も同様で、形容詞を形成する語根の約半数の語根しかこの形を取れないのにも関わらず、若年層はすべての形容詞を形成する語根からこの形を作り出してしまふ。

まとめると、若年層は派生的で限られた生産性を持つ接辞を、生産的な接辞と解釈しなおしている。そして、その接辞により付加される意味をすべての形成された語に適用する。しかしそれらの語の中には高齢層が存在するとは認められないものが多数含まれている。

5.3. 意味の再解釈

若年層はある語の形式に対し、高齢層が付与する意味とは異なる意味を付与していることがある。これは、Cook (1995) で触れられている、'imperfect learning' の結果だと考えられる。例えば、固有名詞の *paniki* (Buha 村を流れる川の名前) を、「川」を表す語だと若年層の話者は捉えていた。高齢層は「川」を *ake mibibi* 'water flow' と言う。その他に、表5に示したような食い違いが観察された。表5においては、OBで高齢層、YBで若年層の Bantik 語を表す。表中の*印は、OBにおいて単独の語でその意味範囲を表しうる単語がないことを示す。

表5 高齢層と若年層で意味的解釈の異なる語形式の例

word	OB meaning	YB meaning	OB word for YB meaning
ma-hiaaruŋ	be piled up	be up and down	*
ma-riduŋ	to bury a body, to cover	to dig	ma-kari
ma-bagoŋ	to wake up	to build	ma-magoŋ
ma-baya	to leave someone free	to be neglected	ma-pa-baya

6. 結語

以上、本稿では、インドネシアのスラウェシ島北部州において、極少数の話者によって話されるある言語の消滅の危機に瀕した状態を述べてきた。スラウェシ島北部州においては、他の言語も同様の状況である。高齢層は伝統的な民族語を保持してはいるが、その Bantik 語の発話にはマナド方言への code-switching が頻繁に認められる。若年層は高齢層の保持する伝統的な民族語とは異なる音韻体系や形態統語論的な規則を持ち、語彙を異なる意味で解釈することがある。

言語が消滅することは避けられるに越したことは無い。しかし、Bantik 族その他の少数民族の血を引くものがアイデンティティを感じるのとはもはや自身の出身の民族語に対してではなく、活力のある地域語のマナド方言に対してである。マナド方言が社会・経済的に有用だと皆が理解し、かつ教育熱心な人々はインドネシア語標準変種の習得に重きを置く状況においては少数民族言語の保存運動や復興運動は生彩を欠く。この地域の諸言語が死滅する前に、最後の姿が記述されることが望まれる。

省略記号

1sg	一人称単数
2sg	二人称単数
3sg	三人称単数
BO	接続詞あるいは名詞の後に置かれ、直前の要素を強調する働きをする小辞。単独で接続詞として用いられる場合は ‘and’ とグロスした。
DP	discourse particle, 談話的機能を果たす小辞
I-	主語の名詞が単数の人間を表す時に付加される接頭辞
KA-	動詞に付加し、「可能」の意味を付加する接頭辞
NE	名詞および接続詞に後続し、文副詞を形成する clitic
NI-	単数の人間を表す名詞に付加する接頭辞で、属格（所有者）を表すときと、Passive Voice において動作者を表すときに付加される
NU-	複数の人間あるいは人間以外の名詞に付加する接頭辞で、属格を表すときと Passive Voice において動作者を表すときに付加される
NU	従属節あるいは関係節を導入する marker
PAKI-	動詞に付加し使役動詞を形成する接頭辞
PAN-	動詞に付加し使役動詞あるいは applicative verb を形成する接頭辞
PRO	不特定の三人称単数を指す代名詞
SI-	単数の人間を表す目的語の名詞に付加される接頭辞
SU-	複数の人間あるいは人間以外の名詞に付加し、目的語の名詞あるいは場所を表す名詞に付加される接頭辞

参考文献

- Adelaar, K. Alexander (2005) Structural diversity in the Malayic subgroup. In: Alexander K. Adelaar and Nikolaus P. Himmelman (eds.) *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 202–226. London: Routledge.
- Adelaar, K. Alexander and David J. Prentice (1996) Malay: Its history, role, and spread. In: Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler and Darrel Tryon (eds.) *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia and the Americas*, 673–693. Berlin: Mouton de Gruyter.
- カルヴェ, ルイ・ジャン (2001) 『社会言語学』東京: 白水社.
- Cook, Eung-Do (1995) Is there convergence in language death? Evidence from Chipewyan and Stoney. *Journal of Linguistic Anthropology* 5: 217–231.
- Dorian, Nancy (1981) *Language death: The life cycle of a Scottish Gaelic Dialect*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Ferguson, Charles A. (1959) Diglossia. *Word* 15: 325–340.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of cognitive grammar, vol. 2: Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1993) Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1–31.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and conceptualization*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Noorduin, J. (1991) *A critical survey of studies on the languages of Sulawesi*. Leiden: KITLV Press.
- Prentice, David J. (1994) Manado Malay: Product and agent of language change. In: Tom Dutton and Darrel T. Tryon (eds.) *Language contact and language change in Austronesian world*, 411–441. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Schmidt, Annette (1985) *Young people's Dyirbal: An example of language death in Australia*. Cambridge:

- Cambridge University Press.
- Sneddon, James N. (1978) *Proto-Minahasan: Phonology, morphology, and wordlist*. Canberra: Pacific linguistics series B, No. 54.
- Sneddon, James N. (1984) *Proto-Sangiric and the Sangiric languages*. Canberra: Pacific linguistics series B, No. 91.
- Sneddon, James N. (ed.) (1985) *Studies in Sulawesi linguistics, Part II: Linguistic studies of Indonesia and other languages in Indonesia*. NUSA vol. 33. Jakarta: Badan Penyelenggara Seri Nusa.
- Stoel, Ruben (2000) Discourse particles in Manado Malay. *Linguistics in Netherlands* 17: 185–198. Amsterdam: John Benjamins.
- Utsumi, Atsuko (2002) The generation difference in Bantik Language. In: Tasaku Tsunoda (ed.) *Basic materials in minority languages 2002 Part 2*, 45–73. Endangered Languages of the Pacific Rim 2002 B008. Osaka: Osaka Gakuin University.
- 内海敦子 (2005) 「バンティック語の構造と接辞の意味・機能」博士論文, 東京大学.

筆者連絡先 :

198-8655 東京都青梅市長淵 2-590

明星大学日本文化学部 (青梅キャンパス)

[受領日 2008年1月31日

最終原稿受理日 2008年6月16日]

Abstract

An Endangered Language in a Multilingual Society: The Case of Bantik

ATSUKO UTSUMI

Meisei University

In Indonesia, while Indonesian, its national language, is full of vitality and immensely influential, many indigenous languages are in danger of extinction. Bantik, spoken in North Sulawesi Province, is one of such languages and serves to illustrate how languages change in various ways as their speakers diminish in number. The focus of this paper is to describe some of the significant changes the Bantik language is undergoing in response to the sociolinguistic situation in which it finds itself. After presenting the interaction of Bantik, Manado Malay, and Standard Indonesian, all of which are spoken in North Sulawesi Province, I will describe the actual performances of aged and young speakers of Bantik. In narrative speech, aged speakers, while retaining most traditional aspects of Bantik, use many Manado Malay words. In contrast to the aged speakers, who use Bantik in everyday conversations with family and friends of the same age, young speakers only have a limited knowledge of the language. They also have phonemic and morpho-syntactic rules quite distinct from those of the traditional Bantik, which strongly suggests that Bantik is undergoing attrition.